



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy



TOYO UNIV.

Newsletter No.22 2015. 10

『エコ・ファンタジー』刊行

環境デザインユニット：河本 英夫

ここ5年間のTIEPhの活動の総決算とでも呼ぶべき論集『エコ・ファンタジー』（山田利明、河本英夫編、春風社）が公刊された。目次は以下のようになっている。



- はじめに 河本英夫
- I 環境への思い
- 1 ファンタスティックな環境 岩崎大
 - 2 触覚性環境 河本英夫
 - 3 食料自給率 山田利明
 - 4 レジリエントな自然共生社会に向けた生態系の活用 武内和彦
- II 一歩後退二歩前進
- 5 非合理の合理性 住明正
 - 6 ケンムン広場：生物多様性モデリング研究における保全生態学と情報学の協働 鷲谷いづみ・安川雅紀・喜連川優
 - 7 消費者が関与する海のサステナビリティ：水産物エコラベルのポテンシャル 八木信行
 - 8 宇宙と環境とファンタジー 石崎恵子
 - 9 マヌカン・レクチャーとフレッシュな生命 池上高志
- III 文化的環境
- 10 初期日本哲学における「自然」 相楽勉
 - 11 南方熊楠・説話研究と生態学の夢想 田村義也
 - 12 大正詩人の自然観：根を張り枝を揺らす神経の木々 横打理奈
 - 13 城外に詠う詩人：中国の山水田園詩 坂井多穂子
 - 14 潜在的人類を探索するワークショップ 安斎利洋
 - 15 エクササイズとしての無為自然 野村英登
- IV 障害者・高齢者・避難者の環境
- 16 22世紀身体論：哲学的身体論はどのような夢をみるのか 稲垣諭
 - 17 移動・移用についての小論 日野原圭
 - 18 カップリング(対化)をととしての身体環境の生成 山口一郎
 - 19 高齢者・障害者の能力を拡張する環境とは 月成亮輔
 - 20 障害者の環境 池田由美

エコは人間の持続的な生存可能性にとって貴重な学問であるはずだが、その重要性を直接感じ取ることは容易ではない。そこにはいくつもの理由がある。そうしたエコそのものの難しさに触れながら、なお前に進むための構想を練ったのが本書である。環境に対してどのような認知能力を活用し、どこで環境を見出していくかにかかわるような議論を組み込んである。科学的な環境対応で見れば、たんに科学的なデータのみでは幾種類もの壁にあたってしまう。そうした壁がどういうかたちで生じて、それに対してどのような選択肢があるかを考察していくような試みとなった。文化的環境については、いわば文化のなかで論じられる「環境」のさまざまな局面を切り取るようになった。またここ数年手掛けている、障害者、高齢者、避難所の環境という新たなテーマ設定も行った。是非一読していただきたいテーマであり、全体としてあらたな問題提起を行う論集となっている。

(2015年9月刊行)

国際シンポジウム「宋代の自然観」

自然観探求ユニット：坂井 多穂子



東洋大学で開催した「日本宋代文学学会 第二回大会」において、TIEPh 主催のシンポジウム「宋代の自然観」を執り行った。

発表者と題目は、(1) 谷口高志氏「記の文学における自然と人為——中唐期から北宋中期にかけて——」、(2) 東英寿氏「欧陽脩の書簡に見られる季節の挨拶をめぐって」、(3) 周裕鍔氏「自然・芸術・宗教——略論《石門文字禪》中的景画詩禪之交融」である。司会は浅見洋二氏(大阪大学)が担当した。

谷口氏は、ある事物・事象についての記録文である「記」という文体には山水や自然に関する描写が多いことに着目し、中唐の白居易や北宋の欧陽脩の「記」の代表作を取りあげた。谷口氏は、自然を観賞するための人工物である「亭台」が「記」のなかに頻見することを指摘し、中唐期以降、北宋中期にかけて増大した「記」の文学を自然と人為という観点から概観した。

東氏は、書簡の冒頭に添えられる季節の挨拶語に着目し、北宋の欧陽脩の書簡の挨拶語を分析・発表した。欧陽脩はその著作『洛陽牡丹記』において、牡丹の栽培方法を季節の移り変わりによって記録するなど、自然の移り変わりや季節の変化を敏感に感じ取っていたことがうかがえる。だが、みずから編纂した作品集『居士集』に収録された書簡には季節の挨拶語がなく、いっぽうでは、南宋の周必大が編纂した欧陽脩集『居士外集』や『書簡』の書簡には季節の挨拶語が書かれるなど、大きな違いがある。東氏はこの違いには、『居士集』『居士外集』『書簡』のそれぞれの編纂過程に理由があると結論付けた。

周氏は、北宋の詩僧(詩を作る僧侶)である惠洪の詩文集『石門文字禪』を取りあげ、そこに風景・絵画・詩歌と仏教禪との融合が表現されていると指摘した。周氏は、その特徴として、(1) 仏教的世界観をもつまなざしで風景を見ることによって、風景の様態を変化させ、宗教的色彩を帯びさせる、(2) 風景をそのまま絵画や詩歌であるかのように見なし、とくにある特定の仏教禪の境地と見なすことすらある、(3) いま居る風景の中の自分を、絵画や詩歌の主役と見なし、いにしへの徳にも匹敵する宗教的形象となって後世に伝わった、という3点を挙げ、さらに、惠洪のこのような態度には、王安石や蘇軾、黄庭堅らの影響もみられると指摘した。

発表のあとには発表者間の活発な議論にくわえ、会場からも質問が多数寄せられ、かなりの盛況をみせた。

(2015年5月30日開催)



ワークショップ「身体と環境」

環境デザインユニット：河本 英夫

日本固有の身体表現である「暗黒舞踏」は、土方巽や大野一雄によって形成され、さらに田中泯や天児牛大によって海外でも展開され国際化してきた。この舞踏は、身体の内在的活動の内発的発現というかたちをとる。その系譜の表現は、ヨーロッパ的な幾何学や力学を基調としたダンスやバレエとは異なり、身体の本能、情動、情感のような内在的、潜在的な活動の発現がそのまま身体の

可能性を拡大するような表現の回路を試行錯誤する企てであった。本鼎談では、ゲストとして和栗由紀夫氏をお招きし、ウィーン大学のシュテンガー教授との討論というかたちをとった。

和栗氏は、土方巽の資料を取り纏めた土方直系の弟子である。土方の残した文書は未だ謎だらけであり、そのためひとたび土方の世界に魅入られてしまうと、一生その衝撃のもとに生きてしまう人も少なからずいる。身体表現を行うことは、言語表現とは別の回路を探り当てようとする試みであり、そもそも身体と言語は本性上折り合いが悪い。その折り合いの悪さを哲学の側から埋めることは容易ではない。そのためには哲学の言語そのものも拡張していかなければならない。ともかくもそうした身体表現での「経験」を取り出すためのセッションとなった。土方巽の表現の中で、「舞踏譜」という奇跡的な表現手法がある。楽譜の五線譜に、身体表現のための手掛かりを書き込んだものであり、土方の才気と狂気が縦横に現れている。多くの小さな発見の積み上げで少しずつピントを結んでいような議論となることは、むしろ必然である。内容の充実したワークショップであった。

(2015年5月21日開催)



TIEPh 定例研究会

環境デザインユニット：河本 英夫



今回は、三つの演題を設定して、議論が行われた。金子有子氏は、長年琵琶湖周辺の環境維持にかかわってきた人であり、琵琶湖周辺での「生態学」の展開をテーマとした議論であった。植物の生態多様性について、統計的手法による一般的な分析的データが示され、また琵琶湖護岸工事がどのような影響をもつのかの考察もあった。いくつかの問題提起的なテーマを論じながら、生態学の現状を示すものになった。

山田利明氏の発表は、年来の論点である「風水思想を環境デザインに組み込み、生かしていくためのもの」である。

気の通りを重視する環境設定の在り方で、外形は中国のいくつかの都市と京都の御所に見られるという。地形的には、山と川の組み合わせであり、北に山があり南に川が流れる立地での都市デザインである。「気」は流体状の「何か」ではあるが、特定の本体ではない。生体と環境の狭間を自在に行き来するような流体であり、身体と環境をつなぐ実質的要素で、イオン性のものか、あるいは既存物質の未知の化合形態か不明だが、ともかく気を中心に構想されていて、理論的にはそれとして整合化されている。

相楽勉氏の発表は、ここ5年間のテーマである「日本哲学の誕生」にかかわる議論である。日本の哲学は、ヨーロッパからの全面的な輸入によって成立する。受容し、こなし、固有のものを作り上げていくプロセスは、言葉で言えば自明なことに見えるが、こうしたプロセスを経た事例は、アジアでは日本しかない。日本の圧倒的な翻訳文化は、実は類例のないものであり、最先端の学術水準を取り入れ、それを自国に有利なものだけを取り入れるのではなく、水準を切り下げて取り入れるのではなく、全面的、体系的に取り入れる翻訳文化である。これは江戸時代の蘭学医による『解体新書』の場合にも見られる。

今回の発表は、美学の受容であり、日本での世界で初めての「美学」講義の開設である。バウムガルテン、カント系譜で受容され、西周は「美妙学」と訳して導入した。美学はその後、大塚保治によって全面的に導入され、日本の美学に仕上げられていくのである。

(2015年7月29日開催)

「モンゴルの自然観および環境デザインの視察」

環境デザインユニット：稲垣 諭

8月24日から28日にかけて、モンゴル、ウランバートル及び、その周辺の国立公園を視察してきた。モンゴルは、ロシアと中国に挟まれた広大な国土をもつが、人口は300万弱である。それに対して家畜は5000万頭いるともいわれ、国土の大半はいまだ牧草地である。とはいえ首都ウランバートルでは、海外投資を進める規制緩和のあおりを受けてか、近年、建築ラッシュとなり、都市化が急激に進められている。その様子は、首都の渋滞状況や工事現場の多さを見てもよく分かる。

昔ながらの風習が維持されながらも近代化が急激に推し進められることによる歪が生じる時期なのだとも思われ、今後の都市デザイン、自然デザインをどのように進めるのかの分岐点でもある。とりわけそのことが顕著になるのが、ゲルという遊牧民の移動式住居と、近代的なマンションが、ウランバートル市内においても、ごちゃ混ぜに点在し、密集していることである。ガイドの話では、人口の6割が今でもゲルで暮らしているとのことだ。この伝統的な遊牧民スタイルと、定住生活スタイルがどのように共生していくのかも大きな課題である。

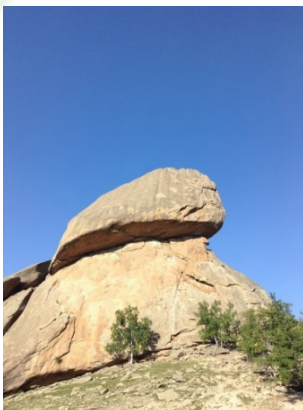


【テレルジの風景とゲル】

8月24日、チンギスハーン空港に降り立った後、ツーリスト用のゲルに宿泊するために、テレルジ国立公園へと車で向かう。モンゴルの夏はもともと日が長く20時過ぎでも明るい、到着したのはすでに22時を回っていたため、周囲の風景も分からないまま、ツーリスト用のゲルに宿泊することになる。ゲルは非常に簡易な作りではあるが、ベッドも電燈もあり、朝方の寒さをしのぐための薪ストーブまで完備されているため、不便はそれほどない。到着前は雨がぱらついていたのだが、ゲルで眠る頃には雲もはれ、満天の星空が見える。天の川のかすみのために星の粒がはっきりと捉えられないほど光に溢れた星空である。いくつもの流れ星もはっきりと見えた。翌朝目を覚ましてゲルを出てみると、広大なモンゴルの大自然の風景に再度圧倒される。巨石が大地から生えたような景観がどこまでも広がっている。これまで済州島、八丈島等への視察でも巨石は見てきたが、どれもここモンゴルに適うものはない。

朝食は、軽めのパンとヤギか羊の暖かいミルク、目玉焼きが出た。その後、テレルジ国立公園内の視察に向かう。

亀石という観光名所にもなっている巨石を見て、そこに登ったのちに、チベット仏教の寺院であるアリヤバル寺院を訪れる。モンゴルの主な宗教はチベット仏教であるが、色彩がとても豊かである。周囲の岩にも信仰を示すロックペイントが彩られていた。どうやら定住生活の最初の選択肢としての寺院の建設は16世紀ごろから行われ始めたようである。



【亀石】



【アリヤバル寺院】

寺院を訪れた後、1937年以降に行われたソビエト政府による大規模な弾圧である大粛清から免れようとした僧侶たち100名ほどが隠れたとされる岩の洞穴を見る。この粛清では、モンゴル人だけではなく、日本人もその被害にあっている。

その後、1時間以上をかけて車でウランバートル市内へと向かう。モンゴルの道路で舗装されているのは幹線道路くらいで、そこから一本脇に入るとほぼ砂利と土の道であり、信号もほとんどない。かりにあったとしても、対向車がいなければ、赤信号でも平気で進む。ウランバートルでは、スフバートル広場を通り、国立のドラマ劇場で行われた民族舞踊、音楽の鑑賞を行う。モンゴルの歌謡技術の中には、1人の人間が低音の声を響かせながら、同時に高音でメロディを奏でるホーミーという独特の歌唱法がある。ほとんど名人芸である。



【ガンダン寺】

26日は、ウランバートル市内にあるガンダン・テンツェリン寺で、チベット仏教の僧たちが実際に行っている朝の修行を見る。立派な寺院や巨大な仏像もあるが、そのほとんどは焼打ちに遭い、再建されたものである。唯一以前の柱だけが一本残されている。

その後、民俗博物館を回り、習俗や風習についての情報を仕入れた後、北部にある旧日本軍兵士の慰霊碑へと向かう。ここでは敗戦後、抑留されたままモンゴルで亡くなった旧日本兵含む日本人800人ほどの慰霊が納められている。もともとモンゴル全土で埋葬されていた遺骨を、その地の土とともにこのダンバダルジャー慰霊公園に集めたとのことである。多くの政治家や一般の日本人も訪れている。

27日は、ウランバートルから西へ90キロほど離れたホスタイ国立公園へと向かう。途中、ミニゴビといわれる牧草地の中で砂漠化した丘陵に立ち寄る。牧草地の砂漠化は急速に進んでおり、多様な生態系が絶滅の危機に瀕している。ホスタイのベースキャンプに寄ったのち、そこからさらに内陸へと入り、遊牧民の家族を訪れる。遊牧民のゲルでは、羊肉と、ヤギの生クリームのようなものを食し、その後、ゲルの組み立て方、水の汲みとり、羊の群れ追いを体験する。

この遊牧民の家族は300頭の家畜を飼っており、夏と冬にゲルを移動させる生活を行っている。家畜からは入手できない野菜等の食材や生活必需品は、ウランバートルまで出て仕入れてくる。太陽光から発電も行っており、それでTVも見られるようである。完全な昔ながらの生活とはいえないが、ここにはそれなりの自足した生活がある。都会の生活に慣れたものから見れば、圧倒的に足りないものばかりではあるが、この家族の子どもたちの笑顔を見ていると、何が足りていないのかを指摘するのは容易なことではない。



【放牧の風景】

日本人であったとしても、たとえば夏休みのひと月の間だけでもこうした家族のもので暮らすという選択肢を入れるだけで、生活や環境に対する感度そのものが切り替わってしまうことは容易に予想される。

またこのホスタイ国立公園では、ウマの野生化のプロジェクトも進められている。タヒという野生化された馬は、繁殖し、今や300頭ほどの群れになっているとのことである。野生化されているため、どこに現れるかが分からないタヒを探して、数百メートルはある岩山を登り、その姿を見ることもできた。

このようにモンゴルでは、いまだに今後の環境とのかかわりを考えるためのさまざまな選択肢に溢れているといえる。とはいえ、帰国日の朝、参加メンバーのすべてが腹痛を訴え、夜中にトイレに駆け込むことにもなる。幸い、大事には至らなかったが、感染症その他に注意する必要があることは言うまでもない。

(2015年8月24～27日)

TIEPh 活動組織 (2015.10 現在)

Toshiaki YAMADA	Professor, Environment Design Unit Project Representative	山田 利明 代表 (センター長) 環境デザインユニット
Takashi OHSHIMA	Professor, Values and Behavior Unit	大島 尚 価値観・行動ユニット
Hideo KAWAMOTO	Professor, Environment Design Unit	河本 英夫 環境デザインユニット
Makio TAKEMURA	Professor, Nature Unit	竹村 牧男 自然観探究ユニット
Shin NAGAI	Professor, Nature Unit	永井 晋 自然観探究ユニット
Tsutomu SAGARA	Professor, Nature Unit	相楽 勉 自然観探究ユニット
Tahoko SAKAI	Associate Professor, Nature Unit	坂井 多穂子 自然観探究ユニット
Ryosuke YAMAMOTO	Professor, Nature Unit	山本 亮介 自然観探究ユニット
Asako NOBUOKA	Associate Professor, Nature Unit	信岡 朝子 自然観探究ユニット
Kiyoshi ANDO	Professor, Values and Behavior Unit	安藤 清志 価値観・行動ユニット
Kazuyu HORIKE	Professor, Values and Behavior Unit	堀毛 一也 価値観・行動ユニット
Kazunari YAMADA	Professor, Values and Behavior Unit	山田 一成 価値観・行動ユニット
Toshio OGATA	Professor, Environment Design Unit	緒方 登士雄 環境デザインユニット
Yuko KANEKO	Associate Professor, Environment Design Unit	金子 有子 環境デザインユニット
Ryo NISHIMURA	Research Fellow	西村 玲 客員研究員
Yoshiya TAMURA	Research Fellow	田村 義也 客員研究員
Taisuke KARASAWA	Research Fellow	唐澤 太輔 客員研究員
Yoshie HAYAKAWA	Research Fellow	早川 芳枝 客員研究員
WANG Yuan	Research Fellow	王 媛 客員研究員
Satoshi INAGAKI	Research Fellow	稲垣 諭 客員研究員
Shinji MUTO	Research Fellow	武藤 伸司 客員研究員
Dai IWASAKI	Research Associate	岩崎 大 研究助手
Hideto NOMURA	Research Supporter	野村 英登 研究支援者
Hayato MASUDA	Project Research Assistant (PRA)	増田 隼人 リサーチアシスタント

事務局からのお知らせ

・平成 27 年 3 月 10 日に行われた国際シンポ「ドイツ文化とエコロジー」の様子は HP で公開されています。

ニューズレター22号 平成 27 年 10 月発行

編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh)

住所: 東京都文京区白山 5 丁目 28-20 6 号館 4F 60458 室 Tel&Fax: 03-3945-7534

E-mail: ml.tieph-office@toyo.jp Website: <http://www.toyo.ac.jp/site/tieph/>